

漢法苞徳塾資料	No. 248
区分	疾病論・病因
タイトル	病證と病機：概論
著者	八木素萌
作成日	1990.05 9期入門講座 1996.03.16 補足

◇病機論の対象と病證学

病機論は病機を論の対象としているが、ここで言う「機」とは「カラクリ」「仕組み」や、そこでの「エネルギー」伝達の経路や伝達の仕方や＝「アルゴリズム」的なものや、を意味している。また「チャンス」を意味する「機」、「機構」の「機」であり、「ハズミ」の「機」でもある。つまり、どんな原因でどんな仕組みでどんな性質が作用して、如何なる疾病が起こり、その時の様子は、どうであり、それは何故か、などを論じる分野である。

例えば「風」の病因としての意味と性質を考え、外感病の場合ならば、五臓では先ず肺を冒すので肺の病症が出現するが、「風」は「木」性の邪として、五臓的には木性の臓である「肝」の変動を示す、幾つかの症候も同時に現わす。また肺は「金」性で、「風」は「木」性の邪であるが、この「木」と「金」は五行的には相剋的な関係であるから、『難経』で言う「微邪」の関係である、故に、さして悪性の「肺」の病症では無いが、なかなか治りにくい病気となる。現代風に表現すれば「風」の邪による肺の症候は、春先におこる「アレルギー」性の病気に他ならない事になる。つらいが働けない訳ではないし中々やっかいで治し憎い、あまり軽んじると思いも掛けず重大な慢性症になる事もある。此处では「風」の一般的性質と、その五行的意味と、『風一陽一木一肝』と言う「シェーマ」と、「木」臓の生理的現象と病理的表現が、問題になっている。更に、この「木」が五行の他の要素との関わり方の特徴の論、つまり、「木」の角度から見た「五行」相関関係論と、その「人」＝「生理学・病理学」的な表現と、が論じられているのである。こう言う問題が「病機論」の分野である。従って、「臓象学」「病症学」とも大きくオーバーラップするものとなる。全体を詳細に論じると、どうしても長大なものになるので、基本シェーマを図式的に示して置くことにする。関係の本では是非詳しく研究して欲しい。

◇五行（木火土金水）の成立と相関的関連性

1. 五行の成立と陰陽

太虚（廖廓・肇基化元）

→太極（太極本無極・故曰太虚）

→両儀（陰・陽）

→四象（陰陽と剛柔の事、

若干の側面＝陰陽では太陰（月）・太陽（日）・少陰（辰）・少陽（星）となり、

剛柔では太柔（水）・太剛（火）・少柔（土）・少剛（石）・

天之四象～日月星辰・地之四象～水火土石・）

→五行（木・火・土・金・水）

→ [干子（十干・十二子）]

邵子（～太虚之初・廓然無象・自無而有・生化肇焉・化生於一・是名太極・

太極動静而陰陽分～）

邵子（～天生於動・地生於静・動之始則陽生・動之極則陰生・静之始則柔生・静之極則剛生～）

（物之大者・莫若天地・天之大・陰陽尽之・地之大・剛柔尽之・陰陽尽而四時成・

剛柔尽而四維成・四象既分・五行以出・而為水火木金土～）

*陽に稟くること多き者は剛にして烈なり

*陰に稟くること多き者は儒くして柔なり

土・四象頼中土之轉移・万物生於土～～～

章氏云；太極為五行之廓者・生物之道也；土為太極之廓者・成物之道也～」とある。

五行に於ける土に位置付けの論がある。「生物」の序列は「水・火・木・金・土」であるが、
「成物」の序列は「土・木・火・金・水」と見る。

	水	火	木	金	土
生数	1	2	3	4	5
成数	6	7	8	9	10

◆天干の五行と地支の五行は下表の通りである。

	五行	木	火	土	金	水
天干	陽	甲 (胆・三焦)	丙 (小腸)	戊 (胃)	庚 (大腸)	壬 (膀胱)
	陰	乙 (肝・心包)	丁 (心)	己 (脾)	辛 (肺)	癸 (腎)
地支	陽	申・寅	辰	酉	卯	戌
	陰	亥・巳	午	丑	未	子

◆十二支・十干の臓腑経絡配当

	肺	大腸	心包	三焦	心	小腸	肝	胆	脾	胃	腎	膀胱
支	未	卯	巳	寅	午	辰	亥	申	丑	酉	子	戌
干	辛	庚	乙	甲	丁	丙	乙	甲	己	戊	癸	壬

元・寶桂芳（太師）『鍼灸四書』より

2. 剛柔夫妻の相関性について

甲己合化土 甲己者土運統之	胆脾セットで脾の調節 (足少陽～足太陰)	陽木（甲）胆 陰土（己）脾
乙庚合化金 乙庚者金運統之	肝大腸セットで大腸の調節 (足厥陰～手陽明)	陰木（乙）肝 陽金（庚）大腸
丙辛合化水 丙辛者水運統之	小腸肺セットで水の調節 (手太陽～手太陰)	陽火（丙）小腸 陰金（辛）肺
丁壬合化木 丁壬者木運統之	心包膀胱セットで木の調節 (手厥陰～足太陽)	陰火（丁）心包 陽水（壬）膀胱
戊癸合化火 戊癸者火運統之	胃腎セットで火の調節 (足陽明～足少陰)	陽土（戊）胃 陰水（癸）腎

注：この『剛柔夫妻関係表』では「陰火」に「心包」が配されている、然も「十干」では「丁」が「心包」に配されている。これは「心」と「心包」の関係が特殊なものとしている認識に由来している。「心包」は「相火」としては「乙・巳」の干支であるから、意味している含蓄には深いものがある。「心ハ君主ノ官」であるから「神ヲ蔵ス」のであるが、生理的機能面は「心包」が担っていると見る為に、具体的な治療の関連では、この表の様に扱われるのである。

補足：「剛柔の配合」と「夫妻の配合」

◆「夫妻の配合」

夫	未・小腸・丙	午・心・丁	甲・胆・子	乙・肝・丑	壬・膀胱・申	癸・腎・酉
妻	庚・大腸・卯	辛・肺・寅	戊・胃・辰	己・脾・巳	丙・三焦・亥	丁・心包・戌

◆「剛柔の配合」

剛	庚・大腸・卯	甲・胆・子	未・小腸・丙	壬・膀胱・申	丙・三焦・亥	戊・胃・辰
柔	乙・肝・丑	午・心・丁	己・脾・巳	辛・肺・寅	癸・腎・酉	丁・心包・戌

3. 【五行の各要素の相互関係論】には、陰陽剛柔や、十干・十二支や、標氣・中氣・本氣や、司天・在泉・左間・右間や、南政・北政や、その他の極めて複雑で膨大な論が在って、かなりの系統的な研究を要する分野である。これは主に『運氣論』の分野に属している。興味ある人は大いに研究して欲しいが、『類経図翼』に要点が網羅されているので、この程度のことは是非知っておくべきであろう。

◆此処では、特に臨床的に重要な事項が問題であるから、これまでに記述して来た事では落してしまった点のみ述べておきたい。それは、『難経』の五十難・五十三難に記述されているものである。「七伝」「間臓」論であり「正邪」「実邪」「虚邪」「微邪」「賊邪」の論である。「予後の判断について」に記述したので参照して欲しい。

◆十干の陰陽と五行配当そしてその相関関係論・十二支の陰陽と五行配当およびその相関関係論・五行の「旺・壮・死・囚・休」の循環の論・『淮南子』『天文訓』には十二支の循環に「生・壮・死」や「生・壮・老」などと表現しているものがある。この循環が五行の循環を媒介する格別なものがあることを述べている。それが「五行の長生関係」と呼ばれている。『40難』の中の「鼻が香臭を知」り「耳が声を聞」くような人身の五感器の生理的な機能の説明に「五行の長生関係」の論理が用いられている・干支の臓腑の旺気の循環の論・等は臨床面でも研究して運用する必要がある問題である。

4. 「旺・壮・死・囚・休」循環

四季	五臓	旺	壮	死	囚	休	五行
春	肝	木	火	土	金	水	木
夏	心	火	土	金	水	木	火
長夏	脾	土	金	水	木	火	土
秋	肺	金	水	木	火	土	金
冬	腎	水	木	火	土	金	水

注：

【旺】はそれぞれの季節に最も盛んになる臓である。

【休】は子育てを終えて育児の負担から免れてホッと一息という所である、然し子は親に背く形で独立する事が多い。そこに親が虚しやすい点がある。そのホッと油断したスキに邪が乗じて病になり易い、つまり邪実になり勝ちである。

【壮】は五行循環論的に見ると【休】に剋される関係にある、つまり【壮】は【休】の邪実を受けて虚しやすい、それ故に【壮】が病むときは「賊邪」に冒される病となっている場合が多くなる。

【囚】は【休】の親に当たり【休】は【囚】の子に当たる、病邪が親から子に伝変すれば虚邪、子から親に伝変すれば実邪となる。

【死】は最も静かに居られる循環位置に在る、もし病むとすれば【旺】の剋を受ける場合となる。

内傷性の変化と季節変動に応ずる反応は、主として背部腧穴に現われる。

【休】に当たるものが邪となっている時（虚邪）には、それを意味する腧穴の反応はややハッキリする。

外邪の反応は腹部の募穴と病臓腑の経の五行的に邪の性質と同義の穴およびその前後の穴（木なら木穴・水穴・火穴）に割合に良く反応している。郄・絡・原は内外ともに反応している。外邪の場合には病因と同義の経と病経（病位を指示している）とに良く反応を現わしていると言える。これらの性質を運用して予防的な施術が出来る。

5. 五行の長生関係

長生関係表

十二支	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
月	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	仲冬	季冬	孟春	仲春	季春	孟夏	仲夏	季夏	孟秋	仲秋	季秋	孟冬
五行	水	土	木	木	土	火	火	土	金	金	土	水

◇病む場合の基本的な認識について

①正気に虚が無ければ病には患ることはない、虚すと「外邪」が侵入して発病するが、これは『外感病』である。または、内虚の為に生み出される正常性を失した「生理的産生物」が内因性の病邪となって作用する為に症状が現われて来る、これは『内傷病』である。従って、『内傷病』が具体的に発症する場合には殆どの場合多少とも『外邪』が関わっている事になる。この他に『不内外因』による発病がある、これは外傷によるものと房勞に由来するものである。

②『外感病』は、「表」から「裏」・「外」から「内」へと向かって行くものである。この事は次のような面をもっている

〈イ〉五体論に言う「皮毛腠理・血脈・肌肉・筋・骨」の順位に随うと言う事を意味している、「皮毛腠理」は「肺」の主る所であり・「血脈」は「心」の主り・「肌肉」は「脾」の主り・「筋」は「肝」の主り・「骨」は「腎」の主る所である。

〈ロ〉三陰三陽の病位論で言うと、「太陽・少陽・陽明・少陰・太陰・厥陰」と言う表裏関係の序列に随うと言うことになる、三陰三陽論に言う場合では「太陽」は「足太陽経」が主なものとなっており・「少陽」は「足少陽経」が主なものであり・「陽明」は「足陽明経」が主なもの・「少陰」は「足少陰経」が主であり・「太陰」は「足太陰経」が主なもの・「厥陰」は「足厥陰経」が主なものとなっている事が、『傷寒論』に記述されている基本的な病証から判るのである。『傷寒論』は病の伝変について「循経伝」「表裏伝」「直中」「並病」「合病」の形態がある事を観察している。

〈ハ〉温病論の成立によって「衛」「気」「榮」「血」辨証と「三焦」辨証が提起されている。

- ・衛気榮血辨証では、「衛」分は皮毛腠理の分であり「太陽経」の分が大部分である、「気」分は陽の分であるが「陽明経」を主として「太陽経」も「少陽経」も関わっている。「榮」分は陰分の陽であり「手足の少陽・陽明」「心包」が関わっており、「血」分は陰分の陰であり「足太陰・少陰・厥陰」なかでも「厥陰」が関わっており「手厥陰・少陰」も関与している。

- ・三焦辨証では「上焦」には「肺」「心包」が配され、「中焦」には「脾」「胃」「大腸」が配されており、「下焦」には「肝」「腎」が配されている。温病論の「三焦」辨証の主要な眼目が『湿熱』由来の病証を主とするものである事を念頭に置いて置く必要があるが、此れもまた病の伝変に一つの系列であるので大切である。

③『内傷病』は情緒の傷害が臓腑の「気」を、或は耗散させ或は凝聚させて、この為に経脈は、機能し難いようになって引き起こされるものと把握されている。故に「内発性」であり、「陰性」である。また生まれ付き体が弱い事から、また、情緒的にもひ弱である事から情緒の障害も多くなるので、「内傷」を病み易い場合も少なくない。然し、具体的に発症する為には、「引き金」の意味を持つ事象が無くてはならない。それを実体的に掌握し認識しなければ、治療は抽象的なものでしか無くなる。この点では、「内傷」による「臓腑機能」の変調と、その変調に由来する経脈機能の異常が、生産し産出する「病因性成分」が、つまり「飲」であり「痰」である。それは「内寒」と結びついたり、陰虚の為に虚火が熾んになったり、時には「飲」がその虚熱と結び付いて「内湿熱」となったりする。このように種々な経路と原因で内発するものが、「内風」「内火」「内燥」「内寒」「内湿」などである。「痰・飲・瘀」が問題となると言う点から、また体質的な問題やライフスタイルの問題なども在ると言う点から、『雑病』ともオーバーラップする。体質的な問題には、先天的なものを主とするが、後天的なもの～つまり偏食が形成するものや、特定の生活や活動の様式が特徴的な姿位・姿勢や体型を形成する、その結果のものなどが在る。また「モノグサ」「怠惰」の為に、「気滞」と「血の結滞」「肥伴症」となっているものもある。

- ④『不内外因』は、あらゆる種類の外傷（刀・槍・銃などの傷、湯・火炎・化学薬品・光線・極度の寒冷などによる凍傷・火傷・熱傷、虫獣による咬刺傷、打撲・捻挫による捻傷・挫傷・骨折、転倒その他による擦過傷、など等）と、食中毒や毒物燕下や長期的偏食や種々の栄養障害と、過労による激しい消耗や姿勢姿位の変異・偏位、怠惰の気虚や長期怠惰に由来する筋肉や骨の脆弱化、そして房勞等である。

◇金匱要略の記述から

『金匱要略』は『傷寒論』とならぶ張仲景の代表的著作である、これは、『傷寒雜病論』の構成部分であるが、『雜病』の診断と治療を記述している重要な古典である。

「問フテ曰ク・陽病十八トハ何ノ謂ゾヤ・師曰ク・頭痛・項・腰・脊・臂・脚掣痛ナリ、陰病十八トハ何ノ謂ゾヤ・師曰ク・咳上気・喘・噦・咽・腸鳴脹満・心痛拘急ナリ、五臟病ニ各々十八有リ・合シテ九十病ヲ為スナリ・人ニ又六微ナル有リ・微二十八病有リ・合シテ一百八病ヲ為スナリ。五勞・七傷・六極・婦人ノ三十六病ハ・其ノ中ニ在ラザルナリ」とある。

従って『雜病』とは「五勞」「七傷」「六極」「婦人三十六病」の事である。

〔語註〕

噦 漢音一エツ・カイ＝呉音一オチ・ケ……シャックリ・またはシャックリをすること。「えずく」「えずき」＝ものが出ないで吐くけはいがする、むかついて吐き気を催すこと。

《類語》

- ・吐一中にたまった物をはき出すこと
- ・嘔一体を曲げて苦しげに声が出るがその割には物が少ししか出ないこと
- ・噫一おくび・げっぷのこと。

咽 咽喉の「咽」で「ノド」の事、つかえた食物をぐっとのみ下すノドブエの事
《類語》吞一ズッシリした物を嚙まずのみ下すこと・飲～液体をのむ

喘 本来は呼吸する時の身体が膨らんだりしぼんだりするさまを言う。
それから「アエギ」と引伸義されており、さらに、ハアハアとあえぐ短い息づかいの事・またはそのような息づかいをすること・などとなっていく、とくに医学的には呼吸音に濁り音や擦過音が混入した息使いをする状態を指して言う。

六微 腑病は臓病に較べると軽いので「六微」と呼ぶ、六腑の病の事である。

五勞 「志勞」「思勞」「心勞」「憂勞」「疲勞」の五つを指して言う。

七傷 「陰痿」・「陰寒」・「裏急」・「精連々」＝（滑精の事）・「精少」・「陰下湿」・「小便苦数、臨時不卒」を言う、

七傷はほとんど房室での損傷、つまり、sex 過剰の為の傷害である。

また、清・汪昂（訊庵）『医方集解』の「大造丸」の項の細字双行に「……七傷

者・大飽傷脾・大怒傷肝・強力挙重・久坐湿地傷腎・形寒飲冷傷肺・憂愁思慮傷心・風雨寒暑傷形・大恐不節傷志………」と記述している。

六極 「気極」・「血極」・「筋極」・「肌極」・「精極」・「骨極」のこと。

婦人三十六病 婦人の生理に特有の傷害、つまり「月経」「妊娠」「出産」「哺乳」に関連している疾病を指している。

五臓病各十八・合為九十病～六因に対応する問題として血の虚と気の虚と気血の両虚との三種がある、故に「 $6 \times 3 \times 5 = 90$ 」となる。五臓にそれぞれ六因の病があり、それは「気虚」「血虚」「気血両虚」の三種の素地によって履患するのであるから九十病となる訳である。

微有十八病・合為一百八病～「微」とは此処では「腑病」の事であるのは既に註した。六腑が「気虚」「血虚」「気血両虚」の三種の素地が生じてのち、その虚に乗じて実「六因」の「邪」が冒す、故に「 $6 \times 3 \times 6 = 108$ 」で一百八病となる訳である。

『金匱要略』の「雜病」には「百合病」「狐惑病」「陰陽毒病」「陰狐疝気」「奔豚気」など等の「精神神経症候」の病に関する記述がある。内傷病を臨床的な必要に照らして具体的に記述しているので、是非詳細に研究すべきである。

◇大過と不及の問題

大過と不及はもともと季節の移り変わりの異常な状態を表現する語である。つまり、暦の上では未だ夏になっていないのに、早くから夏の様に暑くなり、もう暦の上では中秋になっていると言うのに、いつまでも真夏の様な暑さが続く、このような場合には「夏気の大過」で「秋気の不及」の状態と言う。これは単に季節変動があるのみでは無い。それは必ず人身の生理や疾病に影響をもたらす。異常気象については、『素問』陰陽応象大論第5に「～喜怒不節・寒暑過度・生乃不固～」とあり、また太陰陽明論第29には「～陽者天氣也・主外・陰者地氣也・主内・故陽道実・陰道虚・故犯賊風虚邪者・陽受之・飲食不節・起居不時者・陰受之・陽受之則入腑・陰受之則入五臓～」とあるが、「賊風虚邪」とも呼ばれている。

この様な季節の「大過」と「不及」が身体に及ぼす影響について『素問』六節蔵象論第9に「～未至而至・此謂大過・則薄所不勝而乗所勝也・命曰氣淫……至而不至・此謂不及・則所勝妄行・而所生受病・所不勝薄之也・命曰氣迫～」と言う。「未ダ至ラズシテ至ル」とは「気ノ有余」のことであり、この場合には「薄ル所＝侮ドル所＝剋スル所」が「勝ツ所＝剋ヲ受ケル所」に乗ぜられると言う。例えば「木気有余」ならば「金」を侮りまた更に「土＝脾」に乗ずる状態の事である。「不及」の場合には「木不足」の場合には「土」を剋制出来ないので「土気」は「妄行」して「木ノ母」である「水」を凌ぐので「水」が弱り、また「木不足」であるから「金気」は強く「木不足」に作用してしまう様になる、と言うのである。言い換えると「春気大過」の時には「侮金」と「乗土」の状態になり、「春気不及」の場合では「土＝脾」の旺気実が起こって「凌水」と「乗金」を引き起こすのである。清・汪昂（訊庵）はこのように注釈している。

「岐伯曰・大過者其数成・不及者其数生・土常以生也・謂如甲丙戊庚壬・五太之年為大過・其数
 応於成・乙丁巳辛癸・五少之年為不及・其数応於生」(類經)

----- * ----- * ----- * ----- * ----- * ----- * ----- * ----- * -----

☆木

木	生数	3	成数	8	臓	肝	腑	胆
干子配当	陰木（肝）干～乙・子～亥				陽木（胆）干～甲・子～申			
経絡	足厥陰肝経・足少陽胆経							
経別	肝胆の表裏を二合とする							
皮部								
木に配当されるもの	春・東・風・鶏・麦・酸・青・肝・目・筋・怒・呼・癰・頸項・握・ 角音〈ミ〉							
性質	「木性多和而偏則柔」「得木氣則角而仁柔（動物）」「得東氣者多長而秀（植物）」「木曰曲直（名目）」「木主敷（功用）」「木質長（形体）」「木性温（賦性）」「木以応規（五則）」「木徳為仁」<図翼>							
臓象	陰中の少陽・血を蔵す・疎泄を主る・動を主る・升を主る・肝と胆は表裏・肝の液は涙・華は爪・気は脇に応じる・条達を喜んで抑鬱を悪む・肝の神は魂・春氣に通ず							
基本的病証と病機	外感風の症候と内風の症候とがある。これは病症学で学ぶ事とする							

☆火

火	生数	2	成数	7	臓	心	腑	小腸
干子配当	陰火（心） 干～丁・子～午				陽火（小腸） 干～丙・子～辰			
経絡	手少陰心経・手太陽小腸経							
経別	心・小腸の表裏を四合とする							
皮部								
火に配当されるもの	南・夏・熱・羊・黍・苦・赤・心・舌・脈・喜・笑・焦・胸脇・憂・徴音〈ソ〉							
性質	「火性主急而偏則烈」「火性者飛而親上（動物）」「得南氣者多茂而鬱（植物）」「火曰炎上（名目）」「火主燭（功用）」「火質鋭（形体）」「火性熱（賦性）」「火以応衡（五則）」「火徳為礼」＜図翼＞							
臓象	血を主る・喜びを主る・脈と合っし主る・心と小腸は表裏・華は面に在り・気は虚里に应じる・液は汗・熱を悪む・心は神を蔵す・夏氣に通ず。							
基本的病証と病機	発病の機転には外感と内発とがある。別に病症学で学ぶ							

☆土

土	生数	5	成数	10	臓	脾	腑	胃
干子配当	陰土（脾）干～己・子～丑				陽土（胃）干～戊・子～酉			
経絡	足太陰脾経・足陽明胃経							
経別	脾・胃の表裏は三合とする							
皮部								
土に配当されるもの	中央・長夏・湿・牛・稗粟・甘・黄・脾・口・肉・思・歌・香・脊・意・宮音〈ド〉							
性質	「土性多静而偏則愚」「土性者静而喜蔵（動物）」「土爰稼穡（名目）」「土主溽（功用）」「土質圓（形体）」「土性蒸（賦性）」「土以応繩（五則）」「土徳為信」＜図翼＞							
臓象	陰中の至陰・倉廩の官で後天の本・水穀の精密微妙なものを変化させ（＝消化）運搬して全身に敷き広げるといふ運化作用を主る・それで「気血生化の源」といわれる・脾と胃は表裏・体においては肌肉と四肢に合っし、主っている・華は脣・気の応は大腹・液は涎・脾の「神」は意・長夏の湿気に通ず・血を統べる「血ヲ裏ミ五臓ヲ温タム（難経）」・升を主る・燥を喜み湿を惡む							
基本的病証と病機	病機には外感と内発とがある、別に病症学で学ぶ							

☆金

金	生数	4	成数	9	臓	肺	腑	大腸
干子配当	陰金（肺）干～辛・子～未				陽金（大腸）干～庚・子～卯			
経絡	手太陰肺経・手陽明大腸経							
経別	肺・大腸の表裏は六合							
皮部								
金に配当されるもの	西・秋・燥・馬・穀・辛・白・肺・鼻・皮毛・憂・哭・腥・肩背・咳・商音〈レ〉							
性質	「金性多剛而偏則狠」「得金氣則齒而剛利（動物）」「得西氣者多強而勁（植物）」「金曰從革（名目）」「金主斂（功用）」「金質方（形体）」「金性清（賦性）」「金以応矩（五則）」「金徳為義」＜図翼＞							
臓象	陽中の少陰・一身の気を主り呼吸を行なって気的作用を全身的に宣布し「静肅に降下させる」＜気は陽であるが正常であれば陽は下らなくてはならないからこの作用を主っている＞これによって水道を通調させており『心=君子』の条理を示して全体的な調整を行なう役目を「相」として輔けているので「相傳の官」と言われる・肺と大腸は表裏・外には皮毛腠理と合っし・気は胸膈に応じ・液は涕である・「志」は悲・「百脈は肺に会う」と言われ・「神」は魄である・華は毛・音声を主る・嬌臓であって寒熱に弱い・燥を惡む・秋氣の収斂涼燥の氣に通ず							
基本的病証と病機	病機には外感と内発とがある、別に病症学で学ぶ							

☆水

水	生数	1	成数	6	臓	腎	腑	膀胱
干子配当	陰水（腎）干～癸・子～子				陽水（膀胱）干～壬・子～戌			
経絡	足少陰腎経・足太陽膀胱経							
経別	腎・膀胱の表裏は一合							
皮部								
水に配当されるもの	北・冬・寒・豚・豆・鹹・黒・腎・耳・骨・恐・呻・腐・腰股・慄・羽音〈ラ〉							
性質	「水性主動而偏則流」「水性者潜而就下（動物）」「得北気者多堅而曲（植物）」「水曰潤下（名目）」「水主潤（功用）」「水質平（形体）」「水性寒（賦性）」「水以応権（五則）」「水徳為智」＜図翼＞							
臓象	陰中の太陰・「精を蔵す」と言われる様に「先天の精」を蔵して「先天の本」を主る・この「精」によって生長発育と生殖を司っている・腎と膀胱は表裏・水液の代謝を主る・脳、髄、骨、女子胞、三焦等と密接に相関関係にある・華は髪・体は骨・「神」は志・「志」は恐れ・気は腰に応じ・竅を耳と二陰に開き・液は唾・全身の液を主る・納気を主る・蟄蔵と言う・五臓六腑の精を蔵する・冬気の寒氣に通ず							
基本的病証と病機								

- ◆・人体の陽気の根本の事を「元陽」「真陽」「真火」「命門の火」「命火」などと言うが此れ等は腎に在ると見る＝「腎陽」と言う
- ・「腎陰」と言うのは人身の至る所の臓腑組織を濡潤し滋養するものは体液であるが「元陰」「真陰」「真水」「命門の水」とも言う
- ・「腎陽」は温煦と推動の機能を行ない「腎陰」は人身を滋潤する
- ・「腎陰」「腎陽」のこのような重要性を強調して「腎ハ水火ノ蔵」と言う。

基本的病証と病機……病機には外感と内発とがある、別に病症学で学ぶ

- ◆『経別』は『靈枢』経別第11に記述されている。単に表裏に作用し合っているのでは無く、特有の流注を持っており内臓に緊密な関係を持つので内臓疾患の治療に運用される。それぞれの経脈は「正」と「別」がある、上記の他に手少陽と手厥陰の表裏の五合がある。『経別』論は傷寒論の伝病論や病証論とも深い関係があるものと解されるので、研究されなくてはならない。

◇五行の相関関係論について

五行の相互の関係には、次の様なものがある。

☆相生関係

母子関係とも言う、木→火→土→金→水→木の様に循環する。「木」が母である場合には「火」は子であり、「火」が母ならば「土」は子となっている。母子の関係の様に母は子を保育し庇護する関係になぞらえて言う。

☆相剋関係

抑制するものと抑制を受けるものとの関係の事であり、木→土→水→火→金→木の様な関係である、「木」は「土」を抑制し「土」は「水」を抑制し「水」は「火」を剋し「火」は「金」を剋し「金」は「木」を抑制する。然し、これは「土」を中央に位置するものと把握できる場合には東西南北の相互に対抗的な関係として把えられる事がある。東（木＝風＝肝）は西（金＝燥涼＝肺）と向かい合って対抗的に位置しており、南（火＝暑熱＝心）は北（水＝寒冷＝腎）に対抗した位置にある、このように見ると「土」と「水」とは相剋的ではなくなる。

☆長生と相侮

前述の木→土→水→火→金→木の関係には、単なる一方的な制約の関係では無く、相互に依存し合って調整し合うものでもある。相互調整的に依存し合う事によって五行のそれぞれが適正な機能を維持している面がある。これを「長生関係」と言う。また「剛柔夫妻関係」の様な生産性を持っていると言う面もあり、これも含んで「長生関係」と見る立場もある。

相侮関係と言うのは『傷寒論』に言う「横」である、つまり剋される側が剋する所を侮って病邪となっているのであり、『難経』の「微邪」に相当する。

☆五邪論

『難経』五十難五十三難の「七伝」「間臓」論にある「実邪」「虚邪」「正邪」「賊邪」「微邪」の五邪概念と、六因を五行的に把らえて「五邪」とする「五邪」の概念とがある。

◇経脈病証と臟腑病証と四時病証

病症論の記述には「経脈病証」「臟腑病証」「四時病証」の他に「六経＝三陰三陽＝病証」「三焦病証」「衛気榮血病証」「雜病病証」その他種々の記述がなされている。これ等は実は病を把握し認識するアングルの相違であって、記述されている病の相違では無いのである。

経脈論の角度から観察すれば「経脈病証」であり、五臓論から見れば「五臓病証」となり、臓腑論として観察すれば「臓腑病証」と言い、季節が人身に影響しているものを疾病論的に観察し表現すれば「四時病証」の記述となる、「三陰三陽論」の角度から見て記述すれば「六経病証」論となり、三焦論を部位論的に転回した上で臓腑を配当して主に湿熱論的に病を観察して記述すれば「三焦病証」論となる、「衛気榮血病証」も同様に「衛気榮血論」的に病を記述したものである。

このような種々の記述を学んでこそ始めて病の理解把握は全面的で深いものとなると言える。全体を統一的なイメージで把握するように自ら整理しないと強力に運用できるような身についた知識とはならないと思う。それには基本的な概念の把握が大切であろう。試みに若干の方法論的な試案を考えたい。

- ①陰陽分類でこれらの記述を整理しなおす。
- ②五行分類（臓象分類も含む）で整理しなおす。
- ③病因論的分類で整理しなおす。
- ④動態構造論的な機能機構論として整理しなおす。
- ⑤気血榮衛論つまり体成分論として整理しなおす。
- ⑥「先天の陰陽」論＝「真陰・元陽」論、および、「後天の陰陽」論＝「脾胃の陰陽」論、これらの角度から整理しなおす。

これらは、臨床の必要に適合させるという目的に添って行なわれなくてはならない。つまり、病因・病理・病位・病程・治則・順逆・予後などを正確に認識する力量の為に、このような作業が行なわれる必要があると言えるのである。

◇四海穴について

水穀の海（胃）	上兪…気街 ^{#1}	下兪…足三里	#1 天柱の説あり
気の海（膻中）	上兪…柱骨の上下 ^{#2}	前兪…人迎	#2 百勞、大椎の説あり
髓の海（脳）	上兪…蓋（百会）	下兪…風府	
十二経の海（衝脈） 又は {血海} と言う	上兪…大杼	下兪…巨虚の上下廉	